

<はじめに>

このテーマについて調べた理由は、ニュースを見ていて、東北を中心とした被害状況は報道されていて、千葉県における被害状況はほとんど報道されていない。このようなことをふまえ、自分の身の回りの地域で、具体的にどのような被害が出たのかについて、改めて調べることにした。

<新聞記事による千葉県の震災被害>

千葉県の震災被害に関して、震災翌日の朝刊に載った新聞記事は、次の通りである。

- ・ 京葉工業地帯で液状化
- ・ 飯岡漁港に津波
- ・ コスモ石油千葉製油所火災 の3つである。

このうち、「飯岡漁港に津波」では、漁船 10～15 隻が転覆する被害が出た。中には、木に捕まって助かった人もいた。「コスモ石油千葉製油所火災」では、テレビでも大きく報道され、LPG（液化石油ガス）のタンクが爆発、炎上し、男性従業員 1 人が全身にやけどを負うなどして、3 人が負傷した。この他の記事では、成田空港で 14000 人が駐車場などに避難し、数人が負傷した。また、東京ディズニーランドで 69000 人が広場に避難し、けが人や建物の倒壊はなかった。

また、3月11日18:00時点で、2人死亡、1人意識不明を含め、14人が重軽傷を負ったことがわかっている。死亡のうち、1人は、家で転倒して頭を強く打ち、もう1人は、地震の揺れのショックで死亡した。いずれも高齢者だった。

<千葉県の震災被害の詳細>

千葉県防災危機管理課の調べによれば（7月1日15:00時点）、県内では震度5弱～6弱の揺れを観測し、このうち震度6弱を観測したのは、成田市と印西市だった。また、津波の観測値は、銚子2.5m、館山市布良1.72m、千葉0.93mだったが、震災当日は、県内沿岸全市町村に大津波警報または津波警報が発令され、このうち大津波警報は、九十九里・外房・内房・東京湾内湾だった。後に津波注意報になり、3月13日17:58に全て解除された。

県内では20人死亡、2人行方不明、22人重傷を含め、248人負傷となっている。建物火災は12件である。建物被害を見てみると、県全体で旭市が、全壊43%、半壊11%、床上浸水82%、床下浸水37%を占め、被害が特に大きいことがわかる。また県内では、建物の一部破損が28004棟に上る。液状化による敷地被害は約12000世帯に上り、浦安市が約7900世帯と、県全体の66%を占める。津波による被害は、浸水面積17km²、14人死亡2人負傷、全壊408棟、半壊1398棟となっている。県内の避難者数は、最大時で47270人に上った。5月19

日 15:00 時点の避難者数は、旭市で 70 人に上る。

その他にも、水道は、最大時 306254 戸が断水または減水になった。下水道も、最大時 24300 戸が使用制限になり、このうち浦安市が 13000 戸と、県全体で 53%を占めた。現在、水道は復旧し、下水道も仮復旧工事を終了した。電気は、最大時 346000 戸で停電があった。漁業関係では、転覆や乗り上げなど 390 隻に上り、現在、転覆漁船の引き上げは概ね完了し、損傷漁船の修理を進めている。一部の漁協では、のりの養殖にも被害が出た。教育関係では、県立浦安高校と香取市立新島中学校で、地盤沈下などの大きな被害が出た。この 2 校は、他校で授業を実施している。この他にも、県立浦安南高校で液状化被害を受け、旧県立船橋旭高校に一時移転していたが、9 月 1 日から、元の校舎で授業を再開している。

<コスモ石油千葉製油所火災の詳細>

コスモ石油のホームページによれば、6 月 7 日時点で、事故調査を行った後、全ての石油精製装置だけでなく、出入荷設備や配管設備にも、健全性と安全性の確認を進めていて、監督官庁の了承により、一部設備での出入荷を再開している状況である。

また、読売新聞によれば、8 月 24 日、県議会東日本大震災復旧・復興対策特別委員会が視察している。事故当時、法令に違反して、火災を引き起こしたタンクの弁が、開いた状態で固定していた。この点について、委員から質問が相次ぎ、「本震の後、余震でタンクが落下して火災が起きるまでの間、弁を閉じるよう指導したのか」などとただしたのに対し、同社顧問の近藤直正事故調査委員会委員長は、「余震が起きるまで弁を閉じようとはしなかった。」と作業上のミスを認めた。

<千葉県におけるがれきの撤去状況>

県内のがれき撤去は、思うように進んでいない。発生から 1 ヶ月の時点で、旭市では 5 カ所の仮置き場を設置し、1 日に 1000t が運び込まれるが、一向に減らない状況になっている。1 ヶ月で回収された災害廃棄物は、57000t に上っていて、最終的な量の見通しがついていない。市では 4 月 11 日から、分別作業を行っているが、市のゴミ処理施設だけでは手に負えないため、県内の民間業者や周辺自治体と、受け入れ先を調整している状況である。運搬と処分にかかる費用は、10 億円以上を見込んでいる。中には、処分場の周辺に民家があり、ほこりやにおいに関する苦情が寄せられている。また、金属類の持ち去りも出ていて、夜間に警備員を配置し、警察や消防も巡回しなければならない状況だ。

<千葉県の液状化被害>

液状化被害も深刻である。最も被害の大きかった浦安市は埋め立て地のため、液状化により、水分を含む大量の土砂が地表に噴出し、建物の基礎と地盤がずれ、道路が壊れるなどの大きな被害が出た。新浦安駅前歩道部分が沈下し、建物と 30cm 以上の段差が発生。さらに、海に近い地域の道路に亀裂が入り、歩道と 50cm もの段差ができた。また香取市でも、液状化被害

の深刻さに頭を抱えている。都市計画課では、「問題なのは、液状化被害の実態を反映する被害判定の基準がないことだ。」と指摘する。その理由として、液状化で家屋が水平に沈んでも、建物自体に被害を受けなかった場合、補償対象として認定されにくいことが挙げられている。この他では、千葉市美浜区でも液状化の被害があった。

<————地震は、何を変えたのか。>

地震によって、国民が節電に積極的に取り組むなど、「日本人の心」が変わったと思う。

<おわりに>

地震当日は、ちょうど学年末テストの直しをしていた。地震が来た時に、「小さな揺れで収まるだろう」と思っていたが、突然大きな揺れが来た。最初は机の下に隠れていたのだが、何を思ったのか、揺れているさなかに階段を下りてしまった。そうしてダイニングテーブルの下に隠れたのだが、後でものすごく危険なことをしたものだなあと思い、教訓になった。地震が収まった後、すぐにテレビをつけて、津波の映像に唾然としていたのが記憶に残る。

それはさておき、このテーマを調べていて、旭市の想像を超える被害の甚大さや、思うように進んでいないがれきの撤去の実態など、知っていることだけでなく、意外と知らないことも多かった。また、液状化被害が、浦安市だけでなく、ほかの地域でも起こっていたという事実には驚いた。この研究を通して、千葉県の震災被害の実態を、より詳しく知ることができたと思う。

今年の9月には、野田新内閣が発足した。戦後初の千葉県出身の首相として、東北の被災地の復旧復興だけでなく、浦安市の液状化被害や、旭市の津波被害などの復旧復興にも力を注いでいただけることを期待したい。

<参考資料>

- ・読売新聞京葉版 3月12日朝刊
- ・読売新聞京葉版地域面『県議会復興特別委員会の製油所視察』 8月25日朝刊
- ・読売新聞京葉版地域面『一時移転の浦安南高校校舎で授業再開へ』 8月27日朝刊
- ・千葉県ホームページより『東日本大震災による県内の被害状況』
<http://www.pref.chiba.lg.jp/kouhou/h23touhoku/documrnts/20110701higai.gif>
- ・コスモ石油ホームページより『千葉製油所の状況について』
<http://www.cosmo-oil.co.jp/information/110607/index.html>
- ・msn産経ニュースより『発生1か月、遅れるがれき撤去 千葉』
<http://sankei.jp.msn.com/region/news/110413/chb11041320120007-n1.htm>
- ・CANPAN NEWSより『液状化被害で浦安市が激甚災害を申請』
<http://news.canpan.info/2011/03/post-117.html>
- ・千葉県防災危機管理資料『東日本大震災による被害状況と対応』